

2017年9月30日 諜報研究会 於早稲田大学

李香蘭とインテリジェンス人脈

川崎賢子（立教大学）

◇エピソード1

〈上海におけるリュバとの再会〉

◆山口淑子、藤原作弥『李香蘭 わたしの半生』新潮社、1987年

一九四五年五月、上海明光戲院、三日間、昼夜二回公演、日中合作音楽会「夜来香幻想曲」の最終公園の楽屋に現れたリュバと15年ぶりに再会。フランス租界の彼女の家招かれて、奉天で知り合ったユダヤ系白系ロシア人一家が、実はボルシェビキであったことを知る。

◆辻久一『中華電影史話 一兵卒の日中映画回想記 1939-1945』凱風社、1987年

一九四二年に入ると、ソ連映画の配給者が上海における上映をしきりに要請し始めた。その交渉者の一組が、リュバ父娘であった。(略)

一九四五年に入って、陸軍は関東軍の精鋭を南方へ移送したため、いよいよソ連と事を構えるのを避け、親ソ方針を打ち出した。

当時、上海軍報道部は支那派遣軍参謀部の隷下にあったが、総司令部は上海に置く調査・情報等の様々な独立した機関を統合して、上海陸軍部を設立した。上海軍報道部はその一部門となった。なお、特筆しておきたいのは、海軍報道部がこの陸軍部内に同居して、陸軍側と緊密な連絡をとるようになったことである。私の囑託職は依然継続していた。

この陸軍部内で、対ソ接近工作の担当者が森という佐官の参謀であった。

森参謀は、ソ連側と接触した結果であろう、ソ連映画上映の希望の強いのを知り、直ちに華影に連絡し、川喜多副董事長にソ連映画の配給を慫慂した。川喜多は全般の戦局を見て、直ちにその処置を決定した。こうして、五年ぶりにソ連映画は上海に上映されたのである。私はリュバに電話で呼び出され、大変丁寧な感謝の礼を述べられた。(333-334ページ)

この頃、《香妃》の製作待ちというか、シナリオの打ち合わせというか、そういうことで李香蘭が上海に滞在していた。そして、李香蘭が北京の学生時代、リュバと親友であったことがわかった。二人は奇縁ともいべき再会をよこした。

リュバと親密になっていた森参謀はこれを知って、李香蘭に親ソ工作（といっても、まず在上海のソ連官民と交際を深める仕事であろう）に一役買ってほしい、と依頼した。李香蘭の歌唱の力量は、《萬世流芳》などを通じてソ連人も知っている。森参謀は、李香蘭にソ連の歌をうたうよう希望した。リュバが斡旋して、彼女は「カチューシャ」や「黒い瞳」など、ソ連人の愛好する歌謡をロシア人の声楽教師について勉強を始めた。リュバは、森参謀の対ソ工作の重要な窓口の一つになった。(334ページ)

(リサイタルの・引用者注) 裏方の一人として、私はこれほどの成果をおさめるとは予想もしなかった。

このレパトリーには《萬世流芳》の主題歌、「カチューシャ」「黒い瞳」などのロシア民謡も如才なく入っていた。(341 ページ)

◆『李香蘭 私の半生』新潮文庫版、1990年

『中華電影史話』は貴重な資料だが、この件には若干の事実誤認がある。まずリューバと私は「北京時代」ではなく「奉天時代」に知りあっている。また、軍関係者から音楽を通じて日ソ友好につとめてほしいと言われたことはあるが、「工作」を「依頼」されたことはない。さらに、上海での声楽教師は、リューバが斡旋してくれたのではなく、川喜多長政氏が「女優をやめて声楽家の道を目ざすなら、よい先生についてレッスンを怠らないように」と、ユダヤ系ロシア人のベラ・マゼル女史を紹介してくれたのである。ロシア民謡は、奉天時代のマダム・ポドレソフから、すでにほとんど教わっていた。(略)

「工作者」森参謀の意図はともかくとして、リューバも私も、そしてベラ・マゼル女史も、そうした政治的な駆けひきを知らずにいたのだった。(333 ページ)

※しかし、問題は場所ではなくて時系列である。『李香蘭 私の半生』によれば、リサイタルの楽屋にリューバが訪れたのが再会の時であり、リューバは「ポスターの李香蘭の写真をみるとよく似ているし、たしか、ヨシコチャンは奉天でお隣の李家の義理の娘になったはずだった、と思いだしたので、まさかと思ったけど、来てみたの。あなた、どうして女優になったの、いつ上海にきたの、これからどうするの。こんな立派な劇場でうたえるようになるなんて、考えられなかった」(文庫版 329 ページ)と語ったことになっている。これに対して辻久一『中華電影史話』によれば、二人の再会はリサイタルの前である。李香蘭は1944年秋『野戦軍楽隊』を最後に満洲映画協会専属契約を解消して上海に移住する。映画配給の交渉窓口であるリューバが、「延安にも重慶にもフィルムが行っている」とプロデューサーの川喜多長政が満足げであったという『萬世流芳』(1943年)以後、日本人観客、あるいは満洲国の観客だけではなく、中国全土にファンを持つようになった「李香蘭」について、何も情報を持たなかったということがありうるだろうか？ 森参謀にとっての「対ソ工作の重要な窓口」であったリューバの側からみるなら、森参謀もまた対日工作の窓口という二重性をもっていたのではないか？

◇エピソード2

《『私の鶯』(1943年)撮影をめぐる》

◆未公開。満映作品。大佛次郎原作、岩崎昶・製作(満映)、島津保次郎監督・脚本、福島宏・撮影、服部良一・音楽、白井鐵造・振付。ハルビン・サヤービン歌劇団、ハルビン・エンゲルガルド歌劇団、ハルビン・トムスキー劇団から出演者、ハルビン白系露人芸術家連盟、ハルビン・バレエ団、ハルビン交響楽団が参加、ハルビンでロケ。

◆撮影中、通訳としてついていた二人の白系ロシア人のうち、ヒゲをはやしたアレクサンドルという青年が、実はソ連政府がハルビンに放ったスパイだったことが最近わかった。

満映で音楽を担当していた竹内林次さんというかたが終戦後シベリアの収容所に抑留されていたとき、憲兵の制服を着たそのアレクサンドルが日本人捕虜の取調べにやってきて（略）「ボクは李香蘭の素性と行動を調べる使命をおびたスパイだった。彼女が純然たる日本人の山口淑子であること、リューバやマダム・ポドレソフからロシア語を習ったことなど、何でも知っていたよ。彼女の跡をつけて北京、上海、新京と飛びまわったものだ。映画の通訳をつとめたのも、お目あては彼女だったのさ」（文庫版『李香蘭 私の半生』277ページ）

◆昨年（一九八六年）六月、『私の鶯』が東京・新宿の安田生命ホールで初公開上映された機会に、新京脱出の記録『卡子』を書いた一橋大学の遠藤誉さんから、元特務機関の竹中重寿さんというかたを紹介された。竹中さんは満洲国立大学ハルビン学院を卒業するとすぐに、ロシア語の才能を見込まれて関東軍情報本部ハルビン陸軍特務機関に徴用され、スパイ養成所・陸軍中野学校出身者が多くいた「謀略班」に配属された。

配属されてはじめて命じられたのが『私の鶯』の出演者の行状を調べる仕事だった。竹中さんは、上司の山下高級参謀（中佐）の命令で、ハルビン・トムスキー劇団の団員になりすましたスパイと一緒に、主役のバリトン歌手サヤーピンと李香蘭の尾行を担当したという。特務機関は、岩崎さんや島津監督をはじめ、関係者のほとんどをマークしていたのだそうだ。（略）

ところで日ソ双方のスパイたちはおたがいがスパイであることを知っていたのだろうか。またダブル・スパイはいなかったのだろうか。それにしても、私が日本とソ連の双方の特務機関から尾行されていたとは！

※スパイとはつねにすでに「ダブル・スパイ」になりうる条件を備えた者ではないだろうか？

※※「知らない」はずの彼女が、きわめて的確に情報戦・謀略戦の重層性の核心をつくことができているのはなぜだろうか？

※※※少なくとも彼女は、自身が情報戦のターゲットであったことを（当時は知らなかったと断りつつ）認めている。

◇エピソード3

〈田村泰次郎と李香蘭（山口淑子）〉

◆田村泰次郎（1911-1983）。1939年5月初、大陸開拓文芸懇話会派遣団の一員として新京を訪れ、歓迎の宴で李香蘭と同席する。1940（昭和15）年4月26日に召集、11月10日に再応召。田村の先輩格の小説家の丹羽文雄が馬淵逸雄報道部長に直接依頼したこともあり（田村泰次郎宛丹羽文雄書簡、一九四一年二月十三日付、三重県立図書館所蔵）、一九四一年三月ごろには独立混成第四旅団司令部附の宣撫班員に転属（尾西康充「田村泰次郎研究（一）——「肉体の門」自筆原稿の検討——」『三重大学日本語学文学』16巻、2005年6月）、第一軍隷下部隊の第六十二師団で勝川中尉の部下となり、陽泉中心に活動。中国人俳優

の捕虜を使い、反共の演劇活動に利用すべく「和平劇団」を運営。翻刻された田村泰次郎日記（山西省陽泉憲兵隊の検閲済）（『丹羽文雄と田村泰次郎』日本図書センター、2006）によれば「北京の李香蘭君の家から」は、ブロマイドに加え「支那式」の便箋封筒なども送られてきた。1941年5月23日に俘虜となった中国八路軍の文芸団体「太行山劇団第二分団」の旧劇の演者たちに、田村はその便箋と封筒を与え、故郷に手紙を書かせた。「彼らの役に立つならば、便箋、封筒も生きるだらう。すこしづつ、自分になつて来る」（田村泰次郎日記、1941年6月26日）。田村は陽泉の「旅団司令部営外の街中にあった公館で元中共軍の俘虜である宣撫班員たちと一緒に起居していた」、「宣撫活動をしていた美術家の洲之内徹とはそこで知り合った」（尾西「田村泰次郎「肉体の悪魔」論—中国山西省を訪れて（附 和平劇団手帳資料）」『人文論叢 三重大学文学部文化研究科紀要』2007年3月）。洲之内は第一軍司令部嘱託として山西省太原で八路軍の捕虜を集めて対共調査を行っていた。

◆李香蘭（山口淑子）との交友は家族ぐるみで継続し、1942年2月ごろ、北京滞在中の小島政二郎、片岡鉄兵（新民会訪問）、佐々木茂策、佐々木ふさ等に講演依頼を命じられた出張の折、蘇州胡同（後、大二条胡同に転居）の実家を訪ねるなどした。

彼女が「北京の父母のもとへ帰ってきたときは、軍用電話を借りて、当時山西省の陽泉にゐた私のところへ、長距離電話をかけてくれた」（田村泰次郎「山口淑子という女」『スクリーン・ステージ』12号、1948年11月）。

◆田村泰次郎「当分は音楽専門に一李香蘭の心境を訊く」『スタイル』1946年8月によると北京時代に父・山口文雄は酒席で田村に次のように気炎をあげた。

「この前も淑子と話したのですがね、中国との和平のためなら、私は淑子と一緒に、重慶へでも出かけますよ」

「お母さんは薫蘭、妹さんも白蘭とか、紅蘭とか、それぞれに中国名を持つてられる」

※田村泰次郎の宣撫体験と文学についてはさらに分析が必要

※※山口淑子の父・文雄の家で「軍用電話」を借りることができたのはなぜか？

※※※父・文雄が、淑子と一緒に重慶へでも出かけると気概をもらしたとのことだが、彼の中国人脈とはどのようなものだったのか。

◇エピソード4

〈米国公文書館資料から〉

◆1947年2月 ロシアン・クリスマス・パーティー（CIC）

1947年1月、ソ連外交官が開催したロシアン・クリスマス・パーティーに山口淑子が出席し、歌ったのではないか。彼女をパーティーに招いた Effim F. Voevodin はソビエトのエージェントであるが、彼女はそのことを知っていたのか。

◆FAR EAST LIBERATION LEAGUE ペーパー、1951年5月17日に受け取った情報（CIC）

1948年10月ごろ、日本共産党の徳田により日本支部が作られた。北朝鮮では Kim Cheon Hai 金天海が支部を作った。Ri Takumin (Li Tso min)が日本に派遣され、香港から入国、中国人と称しているが北朝鮮出身である。李沢民は1949年5月に三洋貿易会社を東京に創設、1950年6月か7月に大阪支社を設立した。

山口文雄は土肥原賢二と親密な関係にあった。山口は甘粕の元に送り込んだ娘の淑子（李香蘭）の地位を利用して満洲国政府高官の情報を集めていた。山口淑子は1940年、新ハルビンホテルにしばしば土肥原と同宿していた。彼女は特務機関の特別な訓練を受けたのちに女優となった。

山口文雄は、甘粕の義理の兄弟であるカネコ・トシオ金子敏雄と密接に協働していた。

山口文雄は李沢民の三洋貿易会社大阪支社の手助けをし、李が大森に購入した家に、山口淑子の妹清子、その母と共に住んだ。

1951年3月以来、FAR EAST LIBERATION LEAGUE のタシロ・フミヒサ田代文久と関係を維持している。

李は檜橋渡としばしばあっている。（文書に誤字多し。満洲国のインテリジェンスに本当に通じた人物が作成したのかどうか）

◆1951年1月22日 G2 は、山口淑子が中国においてインテリジェンスの訓練を受けていたという疑惑情報の精度を C-3(FAIRLY RELIABLE, POSSIBLY TRUE)と評価している。

◆1952年5月7-9日、FBIのペーパー

1952年2月4日の信頼すべき情報によれば、山口淑子は、大陸で中国共産党が勝利を収めた折に共産党政府側に在日中国大使館を明け渡そうとした人物の愛人であった。

イサム・ノグチと関係者一覧。藤井周二（ママ）、JEANNE AMELIE REYNAL、ERNEST IYAMA、MASAHISA KUMASAKA(YOSHITAKA TAKAGI)など。

電話連絡先など。

◆1953年3月8日、CHINESE COMMUNIST ESPIONAGE AGENTS のペーパー、CIC

1950年5月から6月にかけて、山口淑子の妹は両親とともにフクダヤ（福田屋？）に李（沢民）を訪ねた。

◆1962年9月26日、CHEN CHICOM ESPIONAGE RING のペーパー（Agent Report, US Army liaison Department）

山口淑子は影山巍（東亜同文書院教授を経て九州大学教授）の姪である。（偽情報）

◆1967年11月16日、Peter DRAGALIN ペーパー、710th (MIG)

マコト・オカムラはサンフランシスコで DRAGALIN とシャーリー・ヤマグチについて問われて語った。1946年から1948年、1952年から1955年、1957年から1958年に彼は東京のCIC、441st部隊に配属されたが、DRAGALIN と共に働いたこともなく、ジャック・キャノン率いる特殊機関と接触したこともない。ヤマグチには1946年から1948年にかけて Ernest Listner の自宅パーティーであったことがあり、彼女は、Listner か Bruce R. Brown にエスコートされていた。ごく私的な社交であり、彼女が情報収集をしていたと思わせるところはまったくなかった。

◆1967年11月17日、Peter DRAGALIN ペーパー、710th(MIG)

マサシ・フクモトはハワイで DRAGALIN とシャーリー・ヤマグチについて問われて語った。彼は 1947 年から 1948 年にかけてジャック・キャノンの特殊機関で働いていたが DRAGALIN は同じ部署にはいなかったと明言した。ヤマグチについては、その背後に満洲の諜報機関があるという噂があったため CIC が関心を持ったようだ。二人の関係は知らない。

ジョージ・S・インダはハワイで証言した。彼は 1946 年から 1950 年までジャック・キャノンの特殊機関で働いていたが、DRAGALIN の記憶はなく、DRAGALIN とヤマグチの関係についても情報を持たない。噂によれば 1947 年から 1948 年にかけてヤマグチは著名な映画女優であり、中国大使館、米軍などの要人に多くの友人がいた。

◆1967年12月28日、Peter DRAGALIN ペーパー、115th (MIG)

William Czerny がサンフランシスコで、DRAGALIN とヤマグチについて証言。証言者は、1947年4月に東京に転属し、Area25の特務機関にいた。DRAGALIN も数ヶ月遅れて配属された。ジャック・キャノンの配下である。キャノンは横浜に私宅を構え、東京のオフィスは Ernest Lissner (ママ) が監督していた。彼と DRAGALIN は、1947年後半に横浜の軍のクラブの一つで初めてヤマグチとあった。ヤマグチは Lissner のゲストだった。Lissner が情報部で最初にヤマグチに接触した人物であり、のちに彼に語ったところによると、中国共産党の情報機関との関係を疑ってヤマグチを調べたが疑惑は晴れたという。DRAGALIN とキャノンはヤマグチを争い、DRAGALIN は 1949年あるいは 1950年に韓国に出発するまでヤマグチと親密な関係にあった。

◆1968年1月11日、Peter DRAGALIN ペーパー、116th(MIG)

Louis A. Hennessy がワシントンで証言。DRAGALIN は当初第一ホテルに住んだが、のち、ホンゴウハウスに転居した。ホンゴウハウスは、ジャック・キャノンとアーネスト・リスナーが率いる特殊機関が使用していた場所である。特務機関は G2 の指揮下にあり、日本におけるソビエト情報に関わっていたと考えられる。DRAGALIN はロシア語に秀でていて 441st の他の部署でも翻訳 (通訳) に用いられていた。ヤマグチはリスナー夫妻と親しかった。ヤマグチは 441st のパーティーにしばしば出席したが、リスナーの仲間としてである。情報提供者は 1950 年代半ば、ヤマグチがエド・サリバンのテレビ番組に出演した際に、電話で話をした。伝聞情報だが、ヤマグチが東京のロシア大使館との関係を疑われ G2 に調べられたと聞いている。

Albert C. Reinert がワシントンで証言。DRAGALIN は 1947年10月にホンゴウ・ハウスの特務機関に配属された。エルンスト・リスナーがその部署にいたはずだ。DRAGALIN はロシア語ができたので、その任務は、ソビエト情報に関わるものだったと思う。彼はシャーロー・ヤマグチと付き合っていて 441st の社交の場にしばしばエスコートして羨ましがられていた。知る限りでは二人の関係は自然で個人的なものだった。

※公文書館資料の情報の信憑性について。とくに中国情報が共産党関連に偏りすぎている。

※※戦時下から占領期にかけての親中派の再編、ねじれと重層性はあるが、山口淑子が引揚後も複数の中国人脈と関わり続けたことは事実である。ただし、父親（及び妹清子）の人脈と淑子の人脈とのへだたりは戦後になって越えがたいものになった。おそらく米国入国ヴィザが却下された要因には彼女自身の言動以上に父親（及び妹清子）の人脈と行動があり、父との義絶も経済的な事情だけではなかったろう。

※※※山口淑子ファイルの大半が、1967年末から1968年始めにかけてのDRAGALIN調査であるが、そもそもなぜこの時点でどういう趣旨で調査がされているのか抹消箇所もあり、詳らかではない。

◇今後の課題など

1、1930年代から1950年代にいたる〈貫戦期〉における李香蘭（山口淑子）の変容の連続性（と断絶）を分析し記述すること。戦時期における満洲から上海への移動及び中国と日本との間でのゆれ、「大東亜共栄圏」進出などがすでに語られているが、戦後占領期における、日本とアメリカそして香港（中国語映画圏）における女優としての複数の顔について、どのような枠組みで分析するかが課題である。地政学的には戦時下の中国の複数性と中国大陸における日本、ソ連の越境と干渉、占領期における日本、アメリカ、中国、朝鮮半島、ソ連の国境を超えた交渉を視野に入れなければならない。

2、前世代の研究においてはプロパガンダの側面からの考察が先行し、李香蘭（山口淑子）主演映画は国策映画か否か、またそれに主演した彼女の責任は？といった問題設定のうちにある。インテリジェンス研究の着眼点はプロパガンダ研究のそれ以上に、時間と空間の越境性、主体の多義性を浮かび上がらせる。重要な情報が集積する場所と関係性のなかに彼女を送り出し、彼女から情報を得ようと画策した男性たちに対して、彼女は従属的であったり翻弄されたり利用されたりするだけではなかった。経済力・政治力あるいは芸術的才能と等価の力（権力としても魅力としても）が「情報」という力にはある、というのが彼女の了解するところであったようだ。

参考文献

山口淑子・藤原作弥著『李香蘭 私の半生』新潮社、1987年、文庫版1990年

辻久一『中華電影史話 一兵卒の日中映画回想記 1939-1945』凱風社、1987年

古川隆久『戦時下の日本映画 人々は国策映画を観たか』吉川弘文館、2003年

川崎賢子「李香蘭研究の新視角：米国公文書館「山口淑子ファイル」の検証から」『Intelligence』16号、2016
—「映画「支那の夜」に対する検閲の多元性：米国公文書館所蔵 IWG 文書を参照して」『Intelligence』17号、2017